

サイエンスアゴラ 2016 で学術-メディア連携活動について発表しました(2016/11/6)

テーマ：東日本大震災、学術-メディア連携、防災・減災
場所：日本科学未来館（東京・お台場）

今年度、災害科学国際研究所 IRIDeS は、JST の支援を受け、小野裕一教授（情報管理・社会連携部門 社会連携オフィス）、伊藤潔教授（広報室長、災害医学研究部門）、中鉢奈津子特任助教（広報室）、智片通博特任教授（情報管理・社会連携部門 災害アーカイブ研究分野 客員、元 NHK エグゼクティブプロデューサー）を中心に、「学術-メディア連携企画」を開始しました。2016年11月6日（日）午後、「サイエンスアゴラ2016」のキーノートセッションとして、「震災から5年~いのちを守るコミュニティ」が開催され、中鉢特任助教が代表で、これまでの学術-メディア連携活動の成果を発表しました。サイエンスアゴラは、科学技術振興機構 JST を中心に 2006年より毎年開かれてきた、科学と社会の対話を促進するためのイベントです。

東日本大震災の際、科学界から市民への情報発信が不十分であったという反省があり、研究成果のよりよい社会発信の体制づくりが求められています。科学者のほとんどはコミュニケーションの専門家ではなく、科学界単体では有効な社会発信が難しいという現状があります。このような問題意識に基づき、IRIDeS は、研究者とジャーナリストが相互理解を深め、社会発信に長けたメディアと協働するための「学術-メディア連携企画」を行ってきました。具体的には、ジャーナリストをゲストに迎え研究者と密な意見交換を行う「メディア懇話会」や、産・官・学・民の防災関係者が集まり IRIDeS も協力する「みやぎ防災・減災円卓会議 学術-メディア連携分科会」による、「研究者による新聞社見学会」「ハワイ大学における学術-メディアラウンドテーブル」「学術・メディア連携気仙沼合宿」等です。

サイエンスアゴラのセッションでは、中鉢特任助教が、上記の活動の様様を主に映像を用いて紹介しました。また、今後、学術-メディア連携を通じ、東日本大震災の教訓を次世代および津波災害が起こりうる他地域へつなぐことを目指すこと、最終的には、「仙台防災枠組」の重要目標の一つである「災害による死者数・損害額の大幅削減」に寄与することを目標とすることを述べました。

セッションのモデレーターは森和彦・大阪市立大学都市防災教育研究センター所長がつとめ、室崎益輝・兵庫県立大学防災教育研究センター長はじめ様々な防災関係者が発表を行いました。阪神・淡路大震災の教訓や、熊本地震の取り組み、コミュニティに根差した防災活動、企業や多賀城高校の取り組みなどが共有され、約 100 名の出席者がありました。



文責：中鉢奈津子（広報室）

写真：智片通博（情報管理・社会連携部門）